

Title	著者リプライ：言語論的転回から実践論的転回へー今日の宗教研究の諸相と可能性
Sub Title	
Author	榎尾, 直樹(Kashio, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.142- 143
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

言語論的転回から実践論的転回へ—今日の宗教研究の諸相と可能性

樫尾直樹

1. 謝辞と本稿の目的

この度、書評の労をとっていただいた岡本亮輔氏にまず感謝申し上げたい。

岡本氏は、本書の内容を整理した後、チャールズ・テイラー『今日の宗教の諸相』におけるウィリアム・ジェイムズ批判を対極的参照点としながら、本書の認識論的存在論的前提と見なされる個人主義的意識論に基づく（現代）宗教理解を特に批判している。そこで本稿ではこの一点に絞って応答するとともに、今日の宗教研究の可能性について少しく考えてみたい。

2. ジェイムズ主義？

ジェイムズは、『宗教的経験の諸相』において、宗教的経験という個人的で感情的な側面から「宗教」を一義的、本質論的に理解しようとした。たしかに本書はこうした宗教の個人主義的理解の影響下に書かれた。本書は宗教の核心を「スピリチュアリティ」という術語で表現し、自己超越意識という意識論的側面を中心に宗教を理解している。

しかしながら、①インテグラル理論に基づいて、意識次元とそれ以外の身体、文化、社会の次元の全体性を重視している点、②高次の自己が現在の自己を見るというスピリチュアリティ原理が個人意識的場面だけでなく、社会倫理的場面においても同等に発動される点、および③個人意識的アプローチと社会倫理的アプローチとは等しく宗教実践の両輪であるという点、を考慮して議論しているので、宗教の集合的次元を二義的なものとしているわけではない。

さらに、ジェイムズは宗教的経験の中で神秘主義が最も重要であるとしながらも、瞑想などの身体実践とそれによって喚起される意識変容の内容について議論しなかったのに対して、本書はこの点を明らかにしようとしている。これは単に、宗教における超越的存在と人間という垂直的共同性のみを重視しているのではない。むしろ、人間同士の水平的共同性も（こそ）考慮しなければ宗教の実相を見損なってしまうというテイラー的なジェイムズ批判を反批判し、ジェイムズ主義を深化させようとしているのだ。

3. 自己超越意識と共同性

本書はそれゆえ、意識と共同性との関係性についての再検討の試みでもある。

今日の宗教研究のほとんどは、一部の心理学的研究を除いて表層意識に限定されている。宗教が他領域と異なって、超越的無限的なものに関わる事象であることが存在論的前提であると

すれば、表層意識上の個人意識と集合的共同性という二分法を含んで超える深層意識的な認識論的地平が必要になってくる。

宗教の身体／社会実践がもたらす自己超越意識の生成が、人間に通底する共＝感覚・意識の地下水脈を開くことによって他者との本来の一体性＝共同性（私たちは宇宙の展開の一形態であるという点でひとつだという認識）を発見させる、という事態を捕捉するにはどうしたらいいのか。本書はこうした事態に着目し宗教的共同性を意味論的に再検討することを通して、従来の宗教研究の脱構築を目論み、価値や観念を媒介とした共同性以前の、深層意識レベルにおける非媒介的共同性を指摘したのである。

4. 実践論的転回

個人における意識と身体、個人と集団・社会という二分法を超出しようとするのが宗教であるにもかかわらず、研究者主体は宗教を同様の方法で把握できない。同様の二分法的誤謬は、たとえば宗教社会学では、信念と行為のセットというデュルケムの図式の自明性に緊縛されていることに端的に表れている。今日の宗教研究には依然としてこうした要素論の限界性がある。

祈りは単に内心で想起される観念や想念なのか。儀礼は信念の単なる表現的行為なのか。信念と行為のセットとしての宗教理解にはこのような心理主義の優越性があるが、瞑想行といった個人的身体運動と、コミュニオンなどの様々な集団的儀礼や奉仕などの社会的活動とに通底して働くスピリチュアリティ原理は、「信念」と「行為」と呼ばれるいずれもがインテグラルに効果をもたらす宗教実践であるという実践論的理解がなければ捕捉できない。

言語論的転回以降のポストモダニズムの言説主義はおそらくこうした問題状況を悪化させており、本書はこうした思潮に対して、いわば「実践論的転回」を提起している。

5. 意識論的モデルと体験主義

宗教実践の社会文化的形態は多様である。垂直的共同性を求める人もいれば、水平的共同性を求める人もいて、そのコミットメントの強度は古今東西たしかに千差万別である。

しかし、マジョリティが表面上積極的に自己超越意識を希求しないからと言って、あるいは仮に神秘主義が近代の産物であるからと言って、宗教の固有の特性から超越性を除外するわけにはいかない。ティリッヒの言うように諸価値の中で宗教の目指すそれは「究極的関心」である。

本書が主張しているのは、実践論的転回に基づくこうした宗教固有の一貫した働きであり、身体／社会／文化実践による自己超越意識の生成過程という意識論的モデルである。ここには方法論上の新たな体験主義の要請があり、宗教研究の今日的可能性はここにこそあると筆者は考えている。

(かしお なおき 慶應義塾大学文学部)